

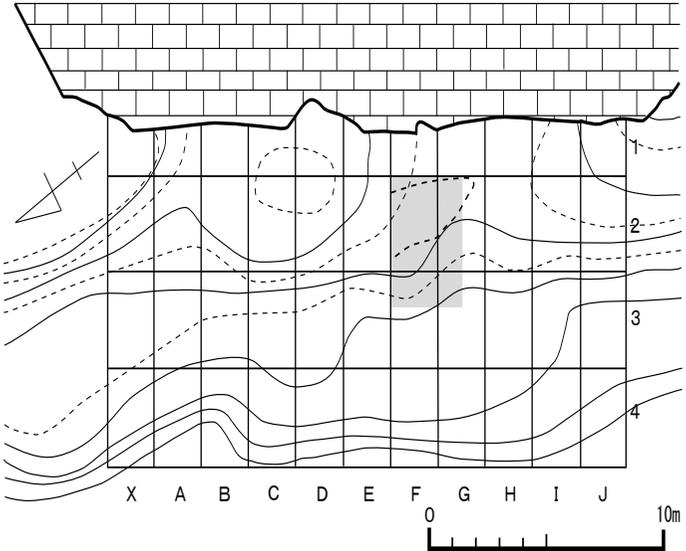


2006 年度帝釈峡遺跡群発掘調査室 Ⅲ期（8月24日～31日）の成果

久代東山岩陰遺跡（くしろひがしやまいわかげいせき）

久代東山岩陰遺跡は、広島県庄原市東城町久代字東山に所在し、東城川の支流である野辺川の左岸の東から南にかけて大きく蛇行する地点にあります。今年度の東山岩陰遺跡の発掘調査の主な目標としては、昨年度の調査で検出された溝状遺構 SX02 の平面的な検出と SX02 の性格の解明です。まず、溝状遺構 SX02 についてですが、この遺構は昨年度の調査で遺構の一部が確認され、またこの遺構からは弥生時代の土器が出土していることから弥生時代の遺構ではないかと考えられていました。弥生土器は大きく分けてⅠ～Ⅴの五つの様式に分けられるのですが、ここではそのうちⅡ様式とⅤ様式の土器が出土しています。この

SX02 が弥生時代の遺構であるか否か、また弥生時代の遺構であれば当時どのように利用されていたのか、ということ今年度の調査で明らかにすることが目的でした。調査はⅠ期とⅡ期・Ⅲ期に分けて行われました。ここでは今年度の調査の成果をまとめてみたいと思います。SX02 については遺構



久代東山岩陰遺跡の調査区の配置
（網掛け部が今年度の調査区）

の形状や性格についてさまざまな解釈が試みられ、最初は溝状遺構でしたが、住居址ではないかといった意見も挙がりました。最終的に遺構の形状と遺構の内部から柱の

跡などが見られなかったことから溝状の遺構であろうという結論が出されました。また、SX02内からは弥生土器が多く出土し、それらの遺物からこのSX02は昨年度の予想通り弥生時代のものであると考えられました。結局、弥生時代にこの遺構がどのように利用されたのか明らかにはなりませんでしたが、SX02のほぼ完全な形状が確認できたこととSX02が弥生時代の遺構であるということが明らかになったことで今年度の調査の目標は達成することができました。今年度で、久代東山岩陰遺跡の発掘調査を終了することとなります。少し寂しい感じもしますが、二十年以上にわたる久代東山岩陰遺跡の発掘調査を自分たちの手で締めくくることができたのは誇らしく思います。今まで発掘に携わってきた先輩方、暖かく見守ってくださった地元の皆様、本当にありがとうございました。



(辻村哲農 3年)

コラム1 「初めての現場と、決意」

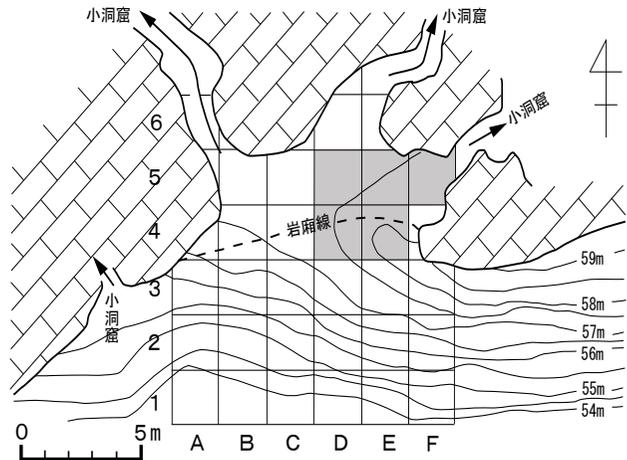
2006年8月25日午前8時25分、久代東山岩陰遺跡に足を踏み入れる。人生初の発掘現場に立った瞬間である。ここだけの話、不安な気持ちで一杯だった。何しろ先輩方（セミプロ）の中に僕（シロート）が交じって調査活動を行おうというのだ。更に悪い事に、僕は予備知識も限りなく“0”に近い状態であった。こんな正真正銘の素人が、そもそも調査活動を為し得るのか？僕はこのような状況にあっても落ち着き払っていただける程の大物では、残念ながら、ない。しかし結局、そんな僕の心中などにはお構い無しで時は流れ、調査活動は始まるのだ。人生とは往々にしてそういうものである。そしてスリリングな8時間が始まった。まずはお約束通り、レベルの設置に手間取るがこれはまだまだ序の口だ。先輩方の指示で地層を掘り下げれば色・質・その他諸々の変化に気付けないまま掘り進む。水選をすれば石ころと土器・石器の区別が付けられない（大量の土器粒を捨てたかもしれないことは、内緒だ）。ミーティングの場ではさも理解したかのような顔をしてみるが、その実飛び交う単語の意味すら把握し切れない。1日の総括である発掘調査日誌は、慎重に言葉を選んで何とか書き上げる。・・・我が事ながら情無い限りである。隣に座る先輩の、細かい図面がびっしりと描き込まれた発掘調査日誌をこっそりと盗み見しつつ、来年は本物の発掘調査日誌を書けるようになっていようと決意する。（横山瑛一 1年）

帝釈大風呂洞窟遺跡（たいしゃくおおぶろどうくつせいせき）

大風呂遺跡ではⅠ・Ⅱ期に引き続いて第2層の調査を行っています。第2層は出土する遺物より、主として古代及び中世に利用していたであろうと考えられる層です。今年度の調査目標であった第3・4層は縄文時代前期・後期にあたると思われます。

Ⅲ期ではD-4・5区、E-4・5区を調査区として作業を進めました。D-4・5区、E-5区では昔の人が火を用いた跡である焼土が検出されており、真上から見た図である平面図や、断面の図、写真を撮ることなどで、焼土の広がりを確認、正確に記録をして今後の研究に生かせるよう調査をしました。また遺物が出土した場合には、遺物名・日付・出土した調査区・何層か・その他特筆事項を記録します。Ⅲ期では土器片・動物骨が出土しました。E-4区では大きな礫（石のことを礫と呼びます。）の除去作業を行いました。礫を除去すると言ってもすべて人力によるものなので、ハンマーで叩いてヒビを入れ、ボールで少しずつ剥ぎ取っていくという非常に大変な作業です。礫を取り除いた遺構の全体は明るく開放的な雰囲気となりました。大風呂遺跡は断続的に利用されていた形跡が認められ、またこの礫は古代から中世の間に崩落したものと考えられるため、礫が崩落したため遺跡の利用をやめたのか、それとも逆に礫が存在するからこそ外部の環境との壁となり遺跡を利用するに至ったのか、と遺跡の性格について考えるきっかけともなるものでした。

今年度は雨の影響などにより予定どおりに進行できず、2層における内容の確認と来年度以降の調査のため礫の撤去作業を行い調査終了しました。現場に出られない日にはⅠ・Ⅱ期に引き続き大風呂遺跡の直下にあ



帝釈大風呂洞窟遺跡の調査区の配置
(網掛け部が今年度の調査区)



る観音堂遺跡との古代・中世における関連性を調べるために土師質土器を調査しています。

大風呂遺跡では今後も発掘調査を続け、この遺跡がどのように利用されてきたのかを明らかにしていきたいと思えます。

(星孝明 3年)

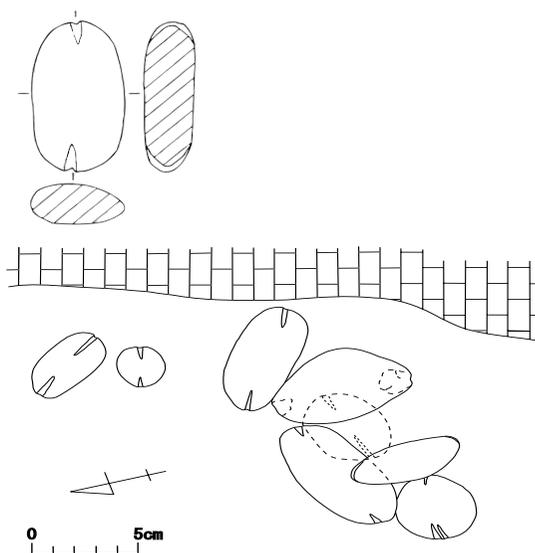
コラム2 帝釈峡の自然

宿舎や現場の位置等を聞いたときに大体予想していたものの、やはり多かった。第一に虻、何の用事があるのかすぐ近くをせわしなく飛び回った揚句、鋭い口で刺してくるのである。これがまた痛いのだ。始めのうちは逃げ回っていたのだが、途中から耐えられなくなった為、発見次第始末することにした。そして蚊、しかも普通のものではなく、いわゆるヤブ蚊が多いのである。大きいので刺された箇所はバンバンに腫れ、痒いというより痛いという他ない。その他にも小虫などが多く、机の上を歩き回る程度ならまだしも、目や味噌汁の中に飛び込むのはお互いのためにもやめて欲しいと思う。しかし、古代の人々もこの様に虫に悩まされていたのかと考えると妙に親近感が湧いてしまう。川の近くや山の中では特に虫が多い為、夏はきっと大変だったことだろう。そんなことを考えながら、私は毎日タオルを片手に虫と闘うのである。

(斉藤友紀 2年)

帝釈峡遺跡群の遺物あれこれ

今回ご紹介するのは久代東山岩陰遺跡から出土した切目石錘（せきすい）です。これは魚をとるために使われたもので、現在の投網のような網の端につけるおもりとして使われました。今回の図のものは、長さ6.95cm、幅3.4cm、重さ74.4gで、縄文時代後期後半のもので、河原によく見られる楕円形の石を利用して、その端部に網を引っ掛けるための切れ目を入れて使用されています。この石錘は、他の13個の石錘と一緒に、第2図にあるように、網につけられたままとと思われる状態で出土しました。このような出土の仕方はほとんど例がなく、非常に重要な資料となっています。縄文時代の帝釈峡の人々はこのような道具を用いて、狩猟のみ



久代東山岩陰遺跡出土石錘

に頼るのではなく、様々なものを食料にしていたのですね。

(参考文献 『帝釈史遺跡群発掘調査室年報』 X 1995 年)

(実盛良彦 3年)

帝釈発掘今昔その2

前回に引き続き再び、食べ物のお話で申し訳ないが、こんな話も知っておいてほしい。

現在の広島大学文学研究科帝釈史遺跡群発掘調査室が開室したのは昭和52(1977)年のことである。帝釈にやってきたその日のうちに、教員も学生も一緒に合宿生活が送れるようになったのであるから、確かに便利になった。

それまではどうだったかというと、広島から芸備線を利用して東城駅までやってきた。そこからバスに乗って、帝釈に向かう。ほぼ1日かかる大移動であった。その日は例の「とらや旅館」に投宿する。次の日、合宿場所に移り、本格的な調査が始まることになる。合宿場所は東城町・帝釈小学校、神石町・永野小学校、同・永野南小学校など年によって異なっていた。それも講堂であったり、作法室であったり、体育館であったりした。民家に分宿することもあった。当然に食事は問題だ。そこで、民家のおばさんに炊事係をお願いすることになり、みんなで民家まで食事に出向くこともあれば、学校の給食室でご馳走になることもあった。メニューはそれなりに工夫していただいていたと思うが、よく思い出せない。皆が喜ぶのはカレーであったように思う。

その頃は、大胆かつ大胆な発掘三昧の日々であったので、何人も大飯食いをしたように記憶している。給食のおばさんたちはそれをとても喜んでくれていた。私もよく食べたが、現在、奈良文化財研究所の埋蔵文化財センター長を務める安田龍太郎氏なんかお腹せの大食いでも有名であった。

帝釈の調査にまつわる食べ物で、私にはこんな思い出がある。昭和45(1970)年当時、岡山大学から多くの調査参加学生がいた。その一人、清水芳裕(現在、京都大学埋蔵文化財研究センター助教授)氏とはよく気が合い、いつも一緒に行動した。ちょうど、清水氏が岡山へ帰る折に、当時、岡山大学考古学講座の教授和島誠一先生が闘病中であつたので、清水氏とともにお見舞いに伺うことにした。先生は広島からよくきてくれたと喜ばれ、病室でマスクメロンをご馳走してくれた。不謹慎ながら、なんとおいしい食べ物があることよと感心したことを思い出す。先生はその後まもなく、亡くなられたが、科学的精神を考古学に注ぎ込まれた先生を思い出すたびに、メロンも同席する。

(調査室長・古瀬清秀)

人物往来

(8月26日)

愛知教育大学教育学研究科 河村善也先生

(8月27日)

ががら子供会の皆さん(9名)

広島大学大学院工学研究科 佐々木元氏

広島大学大学院生物生産学研究科 矢中矩之氏

(8月28日)

広島大学大学院文学研究科 西別府元日氏

陣中見舞い

愛知教育大学の方 お菓子

伊藤さん モロヘイヤ

M2一同 お菓子

加藤さん お菓子

西別府先生 ビール、ジュース

松浦さん お肉

弥生食堂 藤井さん お菓子

足羽さん ビール、ジュース

東海大学 岩崎さん お菓子

大麻さん ジュース

竹広先生 お菓子

藤井さん お野菜

八幡さん 果物

この他、藤井氏御夫妻には宿舎には交流の機会を設けて頂きました。また、地元の皆様には、物心両面で多々ご支援いただきました。最後になりましたがお礼申し上げます。

ありがとうございました。

発掘者名簿(Ⅲ期 8月24日～31日)

広島大学大学院文学研究科 教授 古瀬清秀

〃 助教授 野島永

〃 大学院生 荒平悠、岩崎佳奈、下元優、竹村崇、谷岡能史、前田剛伸 (以上M1生)

広島大学文学部学生 久野陽香、実盛良彦、辻村哲農、星孝明 (以上3年生)

斉藤友紀 (以上2年生)

横山瑛一 (以上1年生)